

戦後80年

昭和60年

家族の記憶 3

漫画家の水木しげるさん
(本名・武良茂、2015年に93歳で死去) 『写真』は、21歳で南方の戦地に送られ、部隊全滅後、爆撃で左腕を失うという凄惨な経験をしている。作品に描く以外、家族に多くを語ることをしなかったその人が晩年、変わった。戦争のことばかり繰り返す語り、膨大な数の付箋を脈絡もなく書斎に貼り付けた。戦地や戦友の名、そして、なお描き残したことがあるというのかのように、人戦死者の話かくVと走り書きされていた。



「お前も死ぬ」

長女の原口尚子さん(62)、次女の水木(武良)悦子さん

水木しげる と長女・尚子さん 次女・悦子さん

あふれ出た「戦死者の話」



水木さんの書斎に貼り付けられていた付箋。引き出しの中からも見つかった(東京都調布市で)＝鈴木竜三撮影

(58)とも、幼い頃に戦争の話を父親から聞かされた記憶はない。戦地での話はきまって、仲良しになった島の住民や食べ物のこと。「いつもニコニコしている片腕のないお父さん」に壮絶な過去があることなど想像もつかなかった。

第1次世界大戦後、ドイツの植民地だった南洋諸島は、赤道以北が日本、以南は豪州などに統治が委任された。水木さんは、この時期に生まれている。1941年の対英米開戦後、日本軍は赤道以南の島々にも侵攻したが、多くが連合軍の反撃にさらされた。43年11月、豪州領ニューブリテン島に築いた拠点ラバウル防衛のために送り込まれたのが、二等兵の水木さんが所属する連隊だった。

ラバウルの現地司令部は、敵陣に近い南西方面のズンゲンへと部隊を差し向け、さらに奥地のバイエンへ水木さんら10人ほどの偵察要員を送り込む。そこを急襲された。歩哨番を交代し、海の見張りについた水木さんを除き、山側の兵舎にいた全員が死亡。水木さんは敵側につく部隊に追われ、服を脱いで海を泳ぎ、蚊にたかられながら密林を逃げ惑った。帰還して待っていたのは、上官の罵倒だった。人なんて逃げ帰ったんだ。皆が死んだんだから、お前も死ぬV(『水木しげるのラバウル戦記』)

空襲が目を追うごとに増えた。しかしマラリアを発症した水木さんは逃げられず、爆撃を食らった。軍医の判断で左腕が切断された。44年6月のことだ。

膨大な付箋

復員後は、紙芝居制作などで日銭を稼ぐ暮らしが続いた。膨大な数の付箋を脈絡もなく書斎に貼り付けた。戦地や戦友の名、そして、なお描き残したことがあるというのかのように、人戦死者の話かくVと走り書きされていた。見張りを交代した兵士のことなのか、何か急な変更があったのか、定かではない。

た。生々しい戦争体験を描いた「総員玉砕せよ!」を発表したのは、漫画家として成功した後の73年だ。陽気な父しか知らなかった悦子さんは、「読んで1週間ほど打ちひしがれた」。

戦争体験を語ることもなかった水木さんが、戦地の記憶をこぼし始めたのは、80歳にさしかかる頃だ。兵士の遺体を葬る穴があったと突然しゃべり出す。戦友たちの顔が頭から離れないと語る。同じ夢の話も繰り返した。戦友に置き去りにされる夢だ。書斎の付箋も増えていった。

「漏れ出ないよう抑えていた感情が、年を取って一気に流れて出た感じでした。わずかに2年ほどの体験がこまめに人を支配するとは」(尚子さん)。付箋の一枚には、人歩哨の順番を代わってくれといった人Vと書かれていた。見張りを交代した兵士のことなのか、何か急な変更があったのか、定かではない。